宮陵会報
2021・12
（令和３）
Kyu-Ryo
No.113

一般社団法人
神奈川大学宮陵会
広報委員会
〒221-0802
横浜市神奈川区六角橋3-27-1
神奈川大学内
TEL 045-481-5661
（内線 2451～3）
FAX 045-413-0791
kyuryou-jimu@kanagawa-u.ac.jp

メタモルフォーゼ（変身）・一服　渡邉　恵子

目次
No.113

会長あいさつ、宮陵会事務局からのお知らせ、プレゼントのお知らせ、表紙のことば、
学生への食品無料配布を振り返って、湘南ひらつかキャンパスの思い出写真募集 ……………… P2-P3
活躍する卒業生〈ヤクルト本社社長　成田裕さん〉…………………………………………… P4
おめでとう！〈女子水泳部 インカレ連続優勝〉〈梶原昂希選手 ベイスターズ入団〉………………… P5
活躍する卒業生〈箱根駅伝優勝時選手 岩原正樹さん〉………………………………………… P6
活躍する卒業生〈デジタル庁統括官 楠正憲さん〉…………………………………………… P7
キャンパス近景〈写真 吉原勇樹さん〉……………………………………………………… P8
恩師はいま〈神奈川大学名誉教授中田信哉さん〉…………………………………………… P9
活躍する卒業生〈株式会社高光建設代表取締役社長 佐藤万寿美さん〉………………………… P10
活躍する卒業生〈建築家　萬玉直子さん〉…………………………………………………… P11
卒業生の声（投稿）〈窪野隆弘さん、内山曜子さん、長谷川知司さん、清水愛乃さん、大薮猛さん、
川島陽一さん、古明地智男さん、篠﨑雄大さん、岡村光惟さん〉……P12-P15
オリジナル横濱スカーフ発売（株式会社KU パートナーズ）……………………………… P15
東京箱根間往復大学駅伝競走応援ガイド………………………………………………………… P16

ごあいさつ

会長
久保　清治

六角橋商店街の仲見世通りの白楽駅寄りに、年配のオバさん一人で夜中でも開けていた小さな立喰いの“おにぎり店”があった。

そこで、ある夜25時頃、地方の田舎出身の貧乏学生、学友と私二人で、白米の大きな「塩むすび」を2個ずつ食った。昼から何も食べておらず、白い“おむすび”は、実に美味しかった。私にはお金がなく、彼が小銭袋を叩いて奢ってくれた。有難たかった。

その店には、その後、何回か行った。店主のオバさんが言った、「ヨタセン（意味わかりますか？）の兄ちゃん、お金無かったら今度でいいよ!」

今から57年前の話である。鮮明に憶えている。学友への感謝の念と“おむすび”の味を想い出すと、何故か、私の眼は一粒の涙で潤む。

今回、別欄のとおり、皆様のご協力により、学生への「食品の無料配布」を実施しました。その学生達にとって、どのような想い出になるか、後々、天空から眺めることにしよう。

読者Present 賞品「オリジナル横濱スカーフ」5名様！

【応募方法】ご希望の方は、はがきに名前、郵便番号、住所、卒業年・学科（現役学生は学年・学科）、宮陵会報113号（本号）の感想を書いて、〒221-0802横浜市神奈川区六角橋3-27-1 神奈川大学宮陵会「プレゼント係」迄お送りください。締め切り2022（令和4）年1月31日（月）＝消印有効。当選者（抽選）の発表は、賞品の発送（2月上旬）をもって代えさせていただきます。（オリジナル横濱スカーフは15ページを参照）

神奈川大学宮陵会広報委員会

宮陵会事務局からのお知らせ

◇ 会議予定

理事会　2022(令和4)年2月5日（土）
3月5日（土）
3月26日（土）予備日

◇ 年末年始休暇

2021(令和3)年12月28日(火)～2022(令和4)年1月6日(木)

◇ 地域組織 新代表者紹介

津久井宮陵会　昭46機　二木一夫様

■ 訃報　謹んでお悔やみ申しあげます。

2021（令和3）年10月6日
永峯暉夫様（昭30経）
前箱根宮陵会会長
元宮陵会代議員

2021（令和3）年10月13日
山本文緒（本名:大湖暁美）様（昭60経）
2001（平成13）年度宮陵会特別表彰
第124回直木賞受賞

2021（令和3）年10月28日
藤井 保 様（昭39貿）
宮陵会代議員
前津久井宮陵会会長

◇ 事務局よりのお願い

【会費納入について】

宮陵会の安定的な運営のため、会費の納入をお願い致します。会費が未納の場合は、会員資格が「普通会員」となり、代議員となる資格がなくなる場合があります。会費の納入依頼は、8月発送の『宮陵会報.112』とともに会員の皆様にお届けしており個々人の金額が明記されております。今一度ご確認ください。

【住所等の変更について】

登録されている氏名・住所・電話番号・勤務先などに変更があれば、ご連絡をお願い申し上げます。

①神奈川大学ホームページ
卒業生のひろば（https://alumni.kanagawa-u.ac.jp/）⇒
卒業生情報登録・変更のご案内

② FAX 045-413-0791

③ E-mail　kyuryou-jimu@kanagawa-u.ac.jp

※登録いただきました情報は、皆様の個人情報の重要性を深く認識し個人情報保護方針に従い適正な保管管理に努めています。

表紙のことば

題名「メタモルフォーゼ・一服」〈大きさF80号〉

苦節20年、念願の二科展の会友推挙で、2点入選した作品のうちの1点です。他の1点は、二科展の作品集に掲載されています。こちらの方がことのほか気に入っています。同窓生T氏の21歳の飼い猫をモデルに（オジサンに変えてしまいましたが）描きました。

渡邊恵子（宮陵会理事1977年法律卒）

湘南ひらつかキャンパスの思い出写真を大募集!!

私たちは神奈川大学経営学部国際経営学会「学生企画プロジェクト」助成金を受けて、湘南ひらつかキャンパス（SHC）からみなとみらいキャンパス（MMC）に移植された桜の木をモチーフにモザイクアートを作成するプロジェクト活動を経営学部4年有志4名で行っています。そこで、モザイクアートに使用するSHCにゆかりのある写真を卒業生の皆さんから募集したいと考えております。思い出のつまったSHCを記録と記憶に留めるモザイクアートを在学生と一緒に作り上げていきませんか。なお今回掲載の写真は、SHCの桜の木をモザイクアートにしたイメージ写真です。今後、皆様からお寄せいただいた写真はMMCに移植された桜の木のモザイクアートに加工して公開予定です。ご協力いただける方は左記QRコード（Googleアカウントへのログイン必須／画像は一度で10枚まで送信可）、またはメールアドレスまでお写真をお寄せください。また、ご質問等ございましたら、左記メールアドレスまでご連絡下さい。

学生に食品配布を説明する宮陵会理事

学生への食品無料配布を振り返って

コロナ禍のなか、宮陵会総会で報告しました学生援助に関する2021（令和3）年度予算に基づき、対面と遠隔のハイブリッド授業に明け暮れる一人暮らしの在学生に向けた食品の無料配布事業を実施しました。その様子を報告します。

（専務理事 佐藤武）

「えっ、こんなにたくさんの種類をいただけるの?うわっ、重い!」これが、カップ麺などのたくさんの食品が詰まった袋を手に取った一人暮らしの女子学生の最初の感想でした。

昨年度から各地で、新型コロナ感染症拡大の影響により食生活に不自由している大学生に対し、所属大学や各種団体による食品等の物資支援の活動が行われています。宮陵会としても、バイトもままならず苦労しているであろう一人暮らしの愛おしい学生に対し、何らかのかたちで支援できないものかと思案を重ねて参りました。

配布した食品

そのような折り、神奈川大学が「新型コロナワクチンの大学拠点接種」（いわゆる職域接種）を横浜キャンパスで計画している話を耳にしました。ワクチン接種後の在学生にチラシを配布し、接種会場から宮陵会本部（30号館）に誘導し、三密を避けたコロナ対策をとり、大きめの袋に入れた食品を配布できないかと考えました。神奈川大学の「新型コロナウイルス緊急対策本部会議」の議長である兼子良夫理事長・学長の了解も得て、8月から10月にかけ行われた2回のワクチン接種期間中の計10日間、宮陵会理事と事務局員とで約1、800人の学生に、食品を配布することができました。

夏場であるため食品は生ものを避け、大学生活協同組合の協力のもと、パックごはん、カップ麺、レトルトカレーなど（＝写真）宮陵会からの激励文や宮陵会紹介チラシ、『宮陵会報』も添え、一人当たり3、000円相当分を配布しました。推計では、関東の1都3県以外の出身学生のうち約7割にあたる学生に配布できたのではないか、と考えています。

最後になりますが、大学事務局の協力のお陰で、一斉メールにより在学生約17、000人に食品無料配布について周知できたことや、拠点接種という大学にとっても煩瑣でかつ一大事業であったにもかかわらず、前もって、大学執行部が宮陵会のこの事業の並行実施に快諾いただいたことに対し、改めて感謝申し上げる次第です。

食品を受け取る学生

締め切り：
2022年1月15日（土）

メールアドレス：
cherryblossomshc.mm@gmail.com

インスタグラム：
cb_shc_mm

（湘南ひらつかキャンパスモザイクアートプロジェクト）
↑こちらから活動の様子がご覧になれます。

連絡先
「湘南ひらつかキャンパスモザイクアートプロジェクト」
代表 縄田幹（経営学部国際経営学科４年）

どんな仕事も楽しく面白く 海外進出で積んだ実績

ヤクルト本社社長・成田 裕さん（70歳）

いうまでもなく乳酸菌飲料メーカーの国内最大手である。今年6月、10年ぶりのトップ交代で社長の座についた。海外事業部門の出身というだけに、さらなる社業のグローバル展開に期待がかかる。お祝いを兼ね東京・竹芝の本社をお訪ねした。（編集部）

インドネシアヤクルトの第１回ヤクルトコンベンション＝1991（平成３）年12月

「いやもう不出来な学生でしたからね」

といきなり謙遜された。

入社のきっかけは大学の就職情報の掲示板。それを見てさほど思い入れもなく応募した。それも縁というもの。いま思うに「これほど楽しく面白く仕事ができるとは」。

入社して15年目。38歳のとき、思いがけず初めての海外勤務の内示を受けインドネシアに赴任した。現地には何の下地もなく、すべて一からの立ち上げだった。だが、それを苦痛とは思わなかった。「なにしろ新しい体験ばかりでしたから」

言葉の壁もさることながら、そこにはそもそも宅配サービスの発想すらなかった。日本で成功した営業の形が当てはまらない。しかもなんでも率先垂範してみせないと現地採用の従業員は動かなかった。だからスラム街にも自ら足を運んだ。

イギリスでも同様だった。プライバシーを重んじる国柄に日本流の訪問ビジネスは通用しなかった。

ことに商品への無知。価値観の違い。バクテリアなど売ったことがないと不安がられた。プロバイオティクスの有用性にうとい当時は乳酸菌も奇異にしか思われなかった。炭酸飲料好きの異国人には、少量のヤクルト飲料が割高にも映った。

それでも、ひたむきな仕事は時間をかけて実っていった。その楽しさ、面白さ。いまや世界40カ国・地域に4,000万人以上の愛飲者がいる。国内売上比率は約4割。ほかは海外のステークホルダーが支える。

◆◆◆

静岡市の生まれ。自転車での遠乗りが好きな、いたっておとなしい子どもだったという。市立静岡高校から神奈川大学経済学部経済学科へ。サークルは貿易研究部だった。

「そこでの学びが少しは役立っているかもしれませんね」

まだ学生運動が盛んで、ロックアウトもあって授業は滞りがちだったものの、コンパなどの学生生活はそれなりに謳歌できたそうだ。

◆◆◆

コロナ禍の今日、健康の大切さを世界の誰もが再認識した。予防医学の必要性もそうだ。いまこそヤクルト創業者の代田稔博士の目指した「健腸長寿」の理念を広めていくとき。自身もそう思っている。

「生命科学の追求を基盤に健康に対する脅威を取り除き、これからも一層、世界の多様な人々の楽しい生活づくりに貢献したい」

今年古希を迎えたが、時にゴルフに興じ、好きなオートバイも乗りこなす若さを保っている。

本学の学生に贈る言葉を。

「最近は安全志向の生き方が多いと聞きますが、これと思ったらまずは飛び込んでみること。躊躇する自分がいれば、後押しする自分も見いだしてほしい。きっとそこには楽しいことが待っていますよ」

楽しいという言葉が自然に出る。インタビュー中、苦労を苦労として語らないところに感じ入った。

なりた・ひろし
1951年10月生まれ。静岡県出身。70歳。74（昭和49）年経済学部卒。同年株式会社ヤクルト本社入社。国内食品事業部から89年に国際部（当時海外部）に転じ、インドネシアやイギリスへの進出に参画。2003年国際部長。10年常務取締役、15年取締役専務執行役員。今年6月社長就任。

イギリスヤクルトの開所式で（当時国際部担当の村上専務と）

祝 第97回日本学生選手権水泳競技大会女子総合二連覇によせて

神奈川大学水泳部 監督　舟橋　道成

第97回日本学生選手権水泳競技大会女子総合二連覇、応援ありがとうございました。これで本当の意味で真の日本一になれた感じがします。

昨年の優勝以降、今年を優勝しなければ本当の意味での日本一ではないと思っていましたが、常に高い目標を持ち続ける選手、コーチ、スタッフのおかげで二連覇を成し遂げることができました。

振り返ると、今春の東京五輪代表選考会では、日本代表を輩出することができず、指導者としての無力さを痛感しました。そこから気持ちを戻すことができたのは、部員達の二連覇をするという覚悟でした。監督着任21年、関東リーグ男子4部・3部・2部・1部、女子2部・1部優勝と歩んだ道が、こうして「大学日本一」それも「二連覇」として迎えられたことは、自分の人生の中で最高の瞬間です。

チャンピオンチームとして、来年以降はさらなる厳しい戦いとなってきますが、更なる飛躍ができるよう努力していきたいと思います。

祝 梶原昂希選手 横浜ベイスターズへ

今年のプロ野球ドラフト会議で地元球団横浜ベイスターズから6位指名を受けた梶原昂希さん（人間科学科4年）。神奈川大学野球リーグで今春までに通算11本塁打をマークし、俊足（50メートル5秒8）と強肩（遠投110メートル）を武器にする外野手だ。プロ入りの夢を実現した梶原さんの活躍に期待したい。（編集部）

かなスポ
E-mail: sports@kanagawa-np.co.jp
FAX045-227-0167

目標「トリプルスリー」

6位　梶原（神奈川大）

「うれしいというのが一番だけど、ほっとした気持ちもある。何とも言い表せません」。6位指名の神奈川大・梶原昂希はオンライン取材に笑顔で応じた。

神奈川大学リーグで今春までに通算11本塁打をマークしている左の強打者。50メートル5秒8の俊足と遠投110メートルの強肩を備えるが、持ち味はやはりフルスイングと130メートル以上を誇る飛距離だ。

「目標はソフトバンクの柳田さん。トリプルスリー（打率3割、30本塁打、30盗塁）は柳田さんの代名詞だけど、いずれは『トリプルスリーと言えば梶原』となるように頑張りたい」

地元球団には神大OBの浜口が在籍。「先輩が活躍しているし、身近なチーム。一流の選手ばかりなので技術面、精神面、何でも吸収していきたい」と抱負を語る。

高校時代はおぼろげだったプロ入りの夢が現実となったが、大学のラストシーズンはまだ終わっていない。「リーグ制覇を決めて関東（地区選手権）を勝ち抜き、神宮でも勝ちたい」。お世話になった元西武の岸川監督らに、華々しい活躍を贈る土産にするつもりだ。（下[illegible]）

◇かじわら・こうき　外野手。大分雄城台高−神奈川大。189センチ、85キロ。右投げ左打ち。22歳。

6位指名を受けてガッツポーズの神奈川大・梶原（同大提供）

2021年10月12日付　神奈川新聞記事

97、98年の優勝時 箱根路を走ったOB
プラウドブルーの襷で箱根駅伝を走りたい

岩原 正樹

地方育ちの私は、選手として走るまでは実際に沿道での箱根駅伝を見たことがなく、テレビ中継に釘付けとなり、都会の夢の世界を見ているようでした。「プラウドブルーの襷で箱根駅伝を走りたい」。その夢を抱いて神奈川大学へ入学しました。

在学中は、1997（平成9）年の第73回大会は8区（平塚―戸塚間）、1998（平成10）年の第74回大会は9区（戸塚―鶴見間）を走り、夢にも見ることのできなかった総合優勝を、現・大後栄治監督の下で2回も勝ち取ることができました。優勝を勝ち取るまでの長い歴史があってこそ、勝利であったと思います。

どこまで走っても続く人垣や耳が痛くなるほどの声援は、スピーカーの音量を全開に回しているような感じで、走り終わった後も、しばらくは耳の痛みが残っていたほどでした。言葉では表すことができない空気を吸い、憧れのプラウドブルーの襷を先頭で繋ぐことができ、「まさか自分が」という感激でいっぱいでした。

8区では、毎年恒例になっている元日本テレビアナウンサー徳光和夫氏の応援で「佐渡の星！頑張れ岩原」と声をかけて頂き、翌年9区でも終始先頭で走ることができました。しかし、大学4年次は怪我の影響でメンバーに入ることができず、走ることが大好きで、走る度にタイムが伸びた私は、最後の箱根路を走れず、悔しい思いを抱えたまま卒業しました。「走ることは自分を表現できる場」としてきた私は、このままで終えてしまうと一生後悔すると思い、社会人実業団の競技生活へと進みました。悔しさをバネに走り続け、駅伝やマラソンを十二分に走ってきました。

実業団引退後は、神奈川大学事務職員として現在に至ります。連覇から20年後の2018（平成30）年と2019（平成31）年には、本学創立者の米田吉盛先生の出身地が愛媛県内子町という縁から「内子町駅伝競走大会」に大学代表として当時のユニホームを着用し、地元ランナーと共に内子路の22・4キロを一人で駆け抜けました。また、今年6月には、地元・佐渡市で東京オリンピックの聖火ランナーを務める貴重な体験もできました。

現在は学生時代に培ったものが土台となり、常に前向きな気持ちで根気良く、目標を掲げて業務に取り組んでいます。これまでの経験を、私一人の力では微力ですが、些細な事でも私の始めたことがきっかけとなり、周りに広がり、それが大きな輪に繋がるよう、母校の発展に貢献して参りたいです。在学中に沢山の支援を頂いた感謝を胸に、現在の学生には、今度は私が縁の下の力持ちとなり、学生生活支援に取り組んで参りたいと思います。

1997年第73回箱根駅伝（戸塚中継所にて襷リレー）

1998年第74回箱根駅伝（9区子安付近）

2018年第13回内子町駅伝（沿道から卒業生の応援）

2019年第14回内子町駅伝（ゴール直後に卒業生との撮影）

いわはら・まさき
1977（昭和52）年2月18日、新潟県佐渡市生まれ。44歳。1999（平成11）年3月経済学科卒業。同年4月YKK株式会社入社。2007（平成19）年2月同社退職。同年3月から神奈川大学事務職員として横浜キャンパス・湘南ひらつかキャンパス勤務地を経て、2021（令和3年）年3月から、みなとみらいキャンパスにて勤務。現在に至る。

東京オリンピックトーチ（みなとみらいキャンパスにて）

学生時代の経験は 人生に大きく影響する 己の感性を信じて学生生活を送ってほしい

デジタル庁統括官 デジタル社会共通機能グループ長
楠 正憲（44歳）

スペイン マラガで行われたカンファレンスでのパネル討議

本年9月、デジタル庁の設立に合わせて統括官デジタル社会共通機能グループ長に着任しました。マイナンバー制度やデータ戦略、自治体システムの標準化といった日本社会をデジタル化していく上で基盤となる制度とシステムを構築するグループです。

東日本大震災後の2011（平成23）年から10年近くマイナンバー制度の立ち上げに補佐官として従事してきました。直近では世界最高レベルの摂取速度を支えたワクチン接種記録システムの構築や、ワクチンパスポートの発行へ向けた準備に取り組んできました。

コロナ禍の直後、たった2週間で構築した特別定額給付金オンライン申請は200万世帯以上の申請に使われました。一方で申請受領後の事務が手作業で滞り、一部団体で紙での申請よりも給付金の支給が遅れました。このことは「デジタル敗戦」と呼ばれ、デジタル庁創設の契機ともなりました。

マイナンバー制度の創設で行政事務における個人の識別や行政機関間のデータ連携は円滑になったものの、マイナンバーカードの普及や住民事務の効率化は道半ばであることが明らかとなりました。デジタル庁は、社会のデジタル化を通じてこうした課題に取り組み、人口減の中で持続可能な社会と経済成長を実現するための検討を進めています。

私が神奈川大学の学生だった1990年代後半は、バブル崩壊後の就職氷河期で拓銀や山一証券が破綻した時代です。同級生の多くは金融機関を志望し、金融ビッグバンについて研究していました。私は講義そっちのけでITベンチャーに入り浸って、ネットバブルの奔流に翻弄されました。当時から雑誌や業界紙で記事を書き、卒論では電子マネー発行体の収益構造を分析しました。

当時の興味はその後ビットコインの分析に繋がり、ISOでブロックチェーンの国際標準化が始まった際は国内委員会の委員長に就任、MUFG（Mitsbishi UFJ Financial Group, Inc.）のDX（Digital Transformation）子会社の設立に技術の責任者として参画、金融庁の検討会で暗号資産交換業等の規制の在り方を検討し、業界団体の外部理事として自主規制ルールの策定にも携わりました。

いま神奈川大学で学んでいる後輩達は私の学生時代と比べて、コロナ禍で対面の講義やサークル活動など難しくなるなど、学生生活も未曾有の変化に直面していることと思います。多感な学生時代に経験したことは、その後の進路に関わらず、思いがけないかたちで人生に大きく影響しますので、自分の感性を信じて大切に過ごしてください。

執務室での様子

くすのき・まさのり
1977（昭和52）年熊本県生まれ。44歳。2001（平成13）年経済学科卒業。インターネット総合研究所、マイクロソフト、ヤフー、Japan Digital Design・MUFGを経て2021（令和3）年9月より現職。2011（令和23）年から内閣官房にてマイナンバー制度を支える情報システムの構築に従事。福岡市政策アドバイザー（ICT）、東京都デジタルサービスフェロー、認定NPO法人フローレンス理事なども務める。

Internet Week 2020で台湾のオードリー・タン政務委員と対談

キャンパス近景

キャンパスライフにも大きな影響をもたらしたコロナ禍。2021年度は様々な感染拡大防止策を施して、対面型授業や課外活動も順次再開。現在、授業はハイフレックス型（対面とオンラインの併用）も導入されて、受講形態が多様化しています。学生たちが戻り活気を取り戻した2021年秋のキャンパスをご紹介します。

文と写真◎吉原勇樹
（1988年　経済卒）

横浜キャンパス

Yoklohama

歴史と伝統を誇る横浜キャンパスは、住宅街のなかにあって四季折々の風情が楽しめます。キャンパスの歴史を見届けてきた木々は秋色に彩られ、一年で最も美しい季節の到来です。〔2021年11月4日撮影〕

湘南ひらつかキャンパス

Shonanhiratsuka

2021年度は理学部・理学研究科のみとなった湘南ひらつかキャンパス。大学祭「平塚祭」はオンライン開催となり、名物イベントの一つ「花火打ち上げ」はライブ中継されました。
〔2021年10月24日撮影〕

みなとみらいキャンパス

Minatomirai

2021年4月に開設されたみなとみらいキャンパス。21階建のビル型キャンパスはあたりの景観に馴染んでいます。1階のレストランやカフェはどなたでもご利用できます。
〔2021年11月10日撮影〕

「恩師はいま」

大学時代にご指導を受けた恩師の消息を紹介します。

神奈川大学名誉教授　中田　信哉

定年後にも結婚式に呼んでくれるゼミの卒業生がいる

「自宅からJR横浜線の成瀬駅に向かってブラブラと散歩する。約20分。2800歩。ヒャッキンを覗き、本屋へ行き、駅前のタリーズに行きつく。ここで1時間ほど滞留し、本を読み、駅前からバスに乗って自宅に2番目に近い停留所から歩いて帰宅する。所要時間は約2時間。歩いた歩数は約3800歩」

これは今年、神大生協で作った私家版の「わが友〝ぶんこ〟、en café」という本の「まえがき」に書いたものです。つまり、非常勤2年、専任29年、その後の非常勤3年の神奈川大学経済学部の勤め人を終了した後の姿であります。その後、企業の委託、行政の委員、業界団体の講習会講師、そして新聞雑誌のコラム執筆、たまのテレビ出演など、まるで無節操な高齢フリーターですが基本は暇人、気がつけばすでに傘寿であります。すべて肩書きは給料なしの神奈川大学名誉教授ですから、神大との縁は切れないのです。

宅急便の小倉昌男氏（右端）と一緒に

思い返してみると神大は楽しかった。特にゼミナールは教育だの勉強などしたことのなかったように思います。ただただ、ゼミ生たちと遊んだ覚えしかありません。「親はなくとも子は育つ」と言います。彼ら彼女らはすべて立派に生きています。「貧乏のために一家心中、振込み詐欺加担」など一人もなく、善良なる市民に育っています。ソロソロ、定年になるものも出ていますが資産家になったものも多いと聞いています。昨年は数百人が参加する3年ごとの「中田ゼミ総会」を開くはずだったのが新型コロナのためにのびのびとなりました。「早く開かなければ俺はこの世からいなくなるぞ」などと言っているわけです。こうしてゼミの連中とは今も交流は続いていますし、学部ゼミや大学院のいわゆる〝教え子〟でどこかの大学の准教授・教授となったのも4、5人います。彼らとは学会の活動で今でも近い関係にあります。こうして神大との腐れ縁は切れず、マッカーサーではないが「老兵は死なず、ただ消え行くのみ」という心境であります。

このように現在は「正しい老後」を送っています。ただ、ある一つのことを申し上げたい。私は20年にわたって専門の研究のために〝宅急便の生みの親〟である故小倉昌男さんと親しくして来ました（追っかけをしていた）。この戦後実業界の大物については今も経営学者や経済ジャーナリストが取り上げようとするのですが当時の小倉昌男さんを直接、知っている人はほとんどいません。ここから私とその世界との接続が今も生まれてくるのです。人の関係こそ老後にとっての宝物だと言えましょう。

なかだ・しんや

◎1941年（昭和16年）、島根県松江市生まれ。慶應義塾大学経済学部を卒業し、明治乳業勤務の後、流通経済研究所など公益法人の研究所の研究員。38歳の時に神奈川大学非常勤講師となり、二年後に神奈川大学の助教授となり、教授を経て定年退職。その間、慶応義塾大学大学院経営管理研究科、一橋大学商学部の非常勤講師など。専門は「流通論」「物流論」。神奈川大学では就職部長、教務部長、学修進路支援部長などを務める。公職は産業構造審議会、運輸政策審議会、環境審議会などの専門委員を歴任。著書として「運輸業のマーケティング」「小売業態の誕生と革新」「ロジスティクス入門」など多数。

庭に来るトリを撮ってみた

コレクションの切子硝子を飾ってみた

シーサーを作ってみた

企業でも「人」が一番の財産

株式会社高光建設 代表取締役社長・佐藤 万寿美（60歳）

私は、希望の外国語学部に入学し、卒業後は輸入商社に就職し、夢見ていた海外との交流も体験することが出来た会社員時代でしたが、やはり地元で中小企業を経営する父の会社の事業承継問題は避けて通ることが出来ず、今はこうして学生時代に学んだものとは全く畑違いの業種の経営者として日々精進、日々学びの毎日を送っております。

私が社長に就任して間もなく、アベノミクスの成長戦略の一つ「女性活躍推進法」の下、女性の社会進出や活躍を支援する動きが活発になったこともあり、私ども建設業でも特に担い手確保のためにも女性の入職者を増やす狙いで立ち上げられた「けんせつ小町部会」の一委員として岩手県と連携して、地元建設産業で働く女性の職場環境改善や活躍促進に関する取り組みを行っています。

全産業の中で一番女性の就業率の低い建設業ですが、最近では女性の技術者も少しずつ増えてきているので、次の世代に繋げていければという思いで活動しています。実際、弊社でも私が社長に就任してから初めて建築施工監理志望の女性社員が入社しましたが、入社の動機が「社長が女性なので働きやすい職場かと思って選びました」と言ってくれたのが、非常に嬉しかったです。それまでは男性中心の建設業で、少なからず引け目を感じることもあった自分に自信を与えてくれた一言でした。彼女が資格を取得し、そして今後子育てしながら一人前の技術者として現場で活躍する日を楽しみにしています。女性が建設業で活躍するのが珍しくない時代が来るでしょうし、女性にとって働きやすい環境であることは、男性にとっても働きやすい環境であると思います。

学生時代は、4年間吹奏楽部に所属し、ホルンを担当していました。授業が終わると連日夜遅くまで練習の毎日でしたので部活の思い出しかないのですが、部活を通じて沢山の人と関わって得たものが一番の財産だと思っています。

企業でも何より「人」が一番の財産です。今後も社員と共に自分も会社も、もっともっと成長出来るよう精進していくつもりです。

弊社が手掛けた、岩手県陸前高田市脇の沢地区の災害公営住宅新築工事

さとう・ますみ
1961(昭和36)年2月、岩手県盛岡市生まれ。1983(昭和58)年3月、神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業。同年4月、丸文株式会社(東京都日本橋、エレクトロニクス関連輸入商社)へ入社し、営業事務として6年間勤務。出産を機に、1989(平成元）年1月に盛岡にUターンし、同時に父親の経営する関連会社の経理担当、後に現在の株式会社高光建設の総務担当。2015（平成27）年12月、代表取締役社長に就任。

◎会社紹介
弊社は 1960（昭和35）年に父・故高橋光雄が高光工務店として創業して以来 60年を迎え、岩手に根差した総合建設業として地域社会に貢献できるもの造りを目指し、建築・土木工事請負施工を中心とした総合建設業として発展。建築工事は公共施設・福祉施設・一般住宅まで、土木工事は道路・河川工事・宅地造成まで行う。資本金7千万円、昨年度売上高 31億円。社員 35人。

建築の仕事は、未来にわくわくできること

建築家・萬玉　直子（36歳）

２０１９（平成31）年、神奈川大学新国際学生寮・栗田谷アカデメイアが竣工しました。世界中から集まった留学生と国内学生が共同生活を通して学び合う施設です。私はコンペで選定いただき、設計者として関わりました。「まちのような国際学生寮」というコンセプトで、２００人の学生のための多様な居場所がいろんなところに散りばめられた建築です。この建築には、大学職員や施工者などいろんな立場から神大の卒業生が参画されていて“メイドイン神大”といっても過言ではないプロセスでつくりました。私は大学院を修了して、まだ十数年の若輩者ですが、多くの神大ＯＢの方々との繋がりをもたらしてくれました。そして、現在は未来を担う神大生がこの施設で寮生活を送っています。先輩から後輩へのバトンが、この建築によって生まれたことも非常に嬉しく思っています。

さて、私は小さい頃から家の間取りが大好きでした。よく新聞の折り込み広告に入っている住宅の間取りを見ては妄想し、自分でも真似して描いていました。中学生くらいになると徐々に設計士という職業があるようだということを意識し始めました。大学は地元の関西で生活環境学を学びながら、神奈川大学の建築学科にある研究室と出会いました。そこで思い切って大学院の２年間を神奈川大学で過ごし、小さい頃からの夢に近づきました。大学院の２年間は、研究室活動で課題に積極的に参加して、本当にあっという間でした。修士設計では学内で優秀賞をもらい少し自信がもてたこと、今でも覚えています。２年間過ごした横浜の街もとても魅力的で、そのまま横浜の設計事務所へと就職し、建築の実践をスタートさせました。建築は、工学的な技術も、法規も、デザインも、様々な要素を総合的に検証してカタチをつくっていくことが求められます。つまりとても下積みが長いとも言えます。

私が建築の仕事をしていて、とても良いなと思うことは、何より“未来にわくわくできること”です。建築を必要とされること自体が、非常に前向きな状況なので「今はないけれど未来にこういうものがあると豊かになるだろう」ということを目指して仕事ができる環境は、とても大好きです。私の建築家の道はまだまだこの先長く（できれば死ぬまで建築の仕事をしていたい）、これからも社会や生活の豊かさにつながる建築を考えていきたいです。神奈川大学・栗田谷アカデメイアの設計経験はその糧になっています。

200人の学生が住む新国際学生寮・栗田谷アカメディアの全景

寮内の開放的な吹き抜け

入寮中の学生の方々と

工事中の見学会のひとコマ

まんぎょく・なおこ
1985(昭和60)年3月、大阪府生まれ。一級建築士。2010(平成22)年工学研究科建築学専攻を修了。同年、横浜の設計事務所オンデザインパートナーズにて建築家として活動を開始。2016(平成26)年に新国際学生寮プロポーザルにて設計者に選定され、2019(平成 31)年に「まちのような国際学生寮(栗田谷アカデメイア)」竣工。

卒業生の声

原稿を募集中
（詳細は15頁）

多くの卒業生から
さまざまな声をお寄せいただきました。

投稿

人生後半の生き方

富山県　窪野　隆弘（84歳）
1965（昭和40）年 経済学科卒

82歳の暮れ、12月28日午前10時頃、妻の書いた年賀状を投函するため、自宅から60㍍離れた郵便ポストまで歩いた。

なんだか胸が苦しい。かかりつけ医は年末休業に入っているし、困った。常備薬の富山「六神丸」を二粒飲み、ソファに横になった。それでも調子が悪い。近くの開業医に電話したところ、「明日は29日だが午前中は診療します」。翌日朝一番でレントゲンや心電図などで検査し、診てもらったところ「病院に連絡し、救急車に来てもらうことにしました」とのこと。生まれて初めて救急車に乗るはめになった。救急車が、ガタことと振動の激しい乗り心地の悪いものだとは知らなかった。

運よく、緊急手術により命を拾った。「心筋梗塞」だった。現代医学の進歩に感謝しなければならない。カテーテル治療だから、身体への負担が少ない血管を広げるステントが、私には二本入っている。

このようなことがあったので、残された限りある人生をどう生きるか。真剣に考え、今後の「道標」を次のように立てた。

①生活を極力コンパクトにする②浪費の習慣をなくす③粗食の習慣を守る④ものを増やさない⑤いらないものは捨てる⑥少ない収入で生活が成り立つようにする⑦喜び、悲しみノートを作る⑧自分本位の生き方をする⑨読書を友とする⑩養生を趣味にする—など、限りなくある。

ただ、現在の体力を考えると何ごとも「やわやわ」と生きるのが、私の現在のモットーである。

投稿

小山吉之助先生の思い出

神奈川県　内山　曜子（66歳）
1978（昭和53）年 経済学科卒

今年、大学の資料編纂室から『神奈川大学人物誌』の『神奈川大学編』が届いた。目次を見ると懐かしい先生方のお名前が並んでいる。小山吉之助先生は、大学三・四年次のゼミナールの担当教授だった。ちょっと怖そうに見えるが、非常に優しく、穏やかで、何事にも真面目な先生だった。

『税務会計論』も受講したが、会計学は簿記が解らなければ授業についてゆけない。そこで、通信教育で簿記を勉強し、日商簿記三級を取得した。ゼミでは、先生が用意したプリントの問題が主だった。実在する会社（社名は仮名）で、実際の帳簿の数値を使い、法人税の申告書の書き方を学んだ。こよりを使った仮綴じ、本綴じの仕方など税理士の作法をも教授し、計算する時はそろばんを使うなど現実的、合理的な一面があった。

私たち二十名のゼミ生は切磋琢磨し合い、有意義な二年間をすごし、卒業した。

先生は、東山魁夷の日本画が好きだった。「税法や会計の勉強だけでは息詰ってしまう。芸術の世界など他の分野を勉強し、自分の勉強と結びつけることが必要だ」。正岡子規の研究をしてもらいたいとも言っておられた。「日本人は科学的な思考法が、身についていない。技術的な物しか身に付けず、科学的な思考を元にした客観主義的な考えがない」。昭和52年11月31日の授業ノートには、こんな先生のことばが記されていた。

正岡子規の研究という宿題は、すっかり忘れてしまい、未だに手を付けていない。今年は、小山先生の三十三回忌にあたる。天国から「まだまだ勉強が足りないなあ」と笑っている先生の顔が目に浮かんできた。

投稿

故郷「観音の里」でのボランティア

滋賀県　長谷川 知司（76歳）
1968（昭和43）年 貿易学科卒

卒業と同時に商社に入社し、海外5カ国に駐在。合併、景気の乱高下等々の波乱万丈の商社勤務を卒業し、50年ぶりに故郷の滋賀県湖北に戻りました。縁あって、地元の国宝「十一面観世音菩薩」（向源寺）のお守役のボランティアを仰せつかり、昔と全く違った平穏な気持ちで過ごしています。

ここ湖北は日本史上ロマンに満ちた地で、古くから交通の要所として知られ、渡来人がもたらした大陸の先進文化や神祇信仰、奈良時代以降の白山、比叡山を中心とした山岳仏教等、長い歴史の中で神仏習合へと変容した精神風土を形作っています。

一方で戦国時代には、姉川、小谷城、賤ケ岳、関ケ原の合戦がこの地を舞台に幾度も繰り返され、そのたびに焼き討ちに遭ったと伝わり、そのためか戦国時代以前を遡る建造物や古文書は殆ど残っていません。

1570年の浅井対織田の姉川の戦時には堂宇は焼かれ、その中で村人達がいのちがけで観音像を持ち出し、やむなく土中に埋めお守りしたのが、私のお守りする十一面観世音菩薩像です。また、焼け焦げた傷ましい姿で安置される観音像も残っています。京都や奈良のような古くて大きな伽藍を構えず、ほとんどが村の小さなお堂に安置されています。村人達が千年以上も献身的に守り継いできた信仰の歴史と、今なお息づくその心が、湖北の精神風土そのもので、ここ高月が「観音の里」たらしめているのだろうと思います。

国宝十一面観世音菩薩は平安初期の作で、作者不詳ながら、日本に存

在する千躯体を超える十一面観世音の中でも最高の傑作と称されています。井上靖の小説『星と祭』に取り上げられ、一躍有名になりました。その井上靖評では「胸から腰にかけて豊かな肉付けも美しいし、ごく僅かにひねっている腰部の安定した量感も見事である。（中略）顔容もまたいい。総体の印象は密教的というか、大陸風というか頗る異色ある十一面観世音である」。ぜひぜひ、皆さんにもご参拝いただき、近くの村々に残る観音像の歴史と永く守ってきた村人との交流を楽しみ、「観音の里」の由縁を感じて頂けたら幸いです。かく言う私も、故郷に戻りいろいろな故郷の風習に寄り添い、学び、同化し、過去と全く違った楽しい穏やかな余生を送らせてもらっています。これもここ湖北の土徳のおかげです。

投稿

神奈川大学で得たもの

埼玉県　清水　愛乃（32歳）
2014（平成26）年 経済学科卒

私が神大生だったころまだ小学生だった妹が今年、高校3年生になり受験を控えています。時が経つのは早いなと思うと同時に「なぜ大学へ行くのか」と改めて考えました。昨今では、学校（小中高大）へ行かなくても良いという意見もよく耳にします。

　私にとって、大学とは夢をつかむための準備をする場所であったと思います。現在、公立中学校で日本語指導担当教諭として勤務しています。もともと「日本語教師になりたいなあ～」というフワッとした夢を高校生のころから持っていました。神大に入り、日本語教員養成課程があることを知り、受講しました。ついでにと中高の社会科教員免許の課程も受講しました。経済学部で日本語教員養成課程を履修している人はおらず、単位数や授業の組み方など苦労した覚えがあります。

　神大で受講した日本語教員養成課程の先生とのご縁で専門学校へも通い、そのご縁で3年半ほどタイの大学で日本語教師をしました。帰国し、中学校の教員免許を持っていたことで現在の職に採用されました。スケジュール管理も学生時代の授業とバイトの両立で鍛え上げられたものが、役に立っています。

　振り返れば失敗もありますが、今充実しているなと思えるのも大学で自分なりに準備してきた結果かなと思います。また新型コロナウイルスが落ち着いたら、キャンパスへ行きたいなと思っています。

投稿

六月の卒業式

千葉県　大薮　猛（81歳）
1963（昭和38）年 貿易学科卒

まさか本当に卒業できないとは思わなかった。教務課の久保課長に呼び出され、「君は規定通りの卒業ができない」と宣告されたのだ。

原因は、体育の単位が足りなかったのである。単位修得の手段として、高尾山登山があった。これで単位を貰えたような記憶がある。4年生になって、1年生と一緒に登るというのは、かなりの屈辱感があった。

結局、まともな卒業は出来なかったわけだが、お情けで六月に卒業させてもらうことになった。6月の或る日、広い講堂に私と同類の単位未修得が集められ、簡易な卒業式が行われた。

　その時、米田学長の祝辞で言われたことが、未だ忘れられない。「君達は電車に乗り遅れたのだが、人生の電車には乗り遅れないようにして欲しい」と言われ、丸い筒に入れられた卒業証書を授与された。卒業証書には38年3月28日と書かれていた。以来58年が経った。

　どうやら、それ以降予定の電車には、乗り遅れず歩むことができた（ような気がする）。もう、ここまでくると、乗り遅れるも何も電車も来ないだろう。卒業できないと宣告された時の、背を流れるような冷や汗は、今でも忘れられない。

　あの3カ月遅れの卒業式と米田学長の挨拶を、懐かしく想い出す。

投稿

思い出の坂道

群馬県　川島　陽一（61歳）
1984（昭和59）年 工業経営学科卒

40数年前の凍てつく朝、初めて白楽駅に降り立った私は、改札を出ると立ち止まりもせず、誘導に従って六角橋商店街のなだらかな坂道を走り出した。入試当日の朝、乗車電車を間違え、試験の開始時間が迫っていたのだ。中学・高校と陸上部で長距離を専門種目としていた私には、比較的余裕の走りだったが、六角橋の信号を超えると状況は一変した。事前の下見をしていなかったため、その後の学校までの登りの坂道が想定外だった。何度か立ち止まり、息を切らせて会場についた時には、開始時刻を10分オーバーしていた。それでも、幸運にも合格でき、その後何百回と同じ坂道を通って通学することになった。

　先日、その坂道を久しぶりに歩いてみた。卒業以来、学校を訪れたことは何度かあるが、駅からの道を学生時代と同じように歩いたのは初めてだった。当然、両側の店舗や家並みは様変わりしていたが、坂のある地形は全く変わっていなかった。歩きながら、当時の喧騒といろいろな日常の記憶が鮮明に蘇ってきた。

　途中、事前に調べてまだ存在を確認してあった、学生時代に良く通った六角橋信号近くにある「天せ」で天丼を食べ、腹ごしらえを終えて学校に向かった。当時は全く感じなかったが、還暦を過ぎた体には、やはり多少きつい坂道だった。疲れたが、この時の疲れは何故か懐かしくて心地よく、また、少しの間余韻に浸っていたい疲れでもあった。

　キャンパスを散策し、ひとしきり思

い出に浸った後、そのまま歩いてみなとみらいキャンパスに向かった。1時間弱で到着したが、おしゃれな建物が毎年立ち並ぶみなとみらいの中において、決して見劣りのしない、立派な建物がそそり立っていた。
この建物も、いずれは老朽化していく。しかし、この光り輝くキャンパスで学ぶことが出来る学生達には、どうかいつまでもその輝きを失わない、貴重な思い出作りの場として充実した青春時代を謳歌してもらいたい。

投稿

大学生活の想い出

山梨県　古明地 智男（79歳）
1964（昭和39）年 電気工学科卒

1960（昭和35）年3月、中央線八王子駅で横浜線に乗り換え、東神奈川駅から路面電車で六角橋まで行き、徒歩で学生寮・宮面寮に着いた。学生生活の始まりである。寮室は4畳間くらいの2段ベッドで、相部屋の同僚は広島出身の石田君であった。寮は学校の敷地を見下ろす丘にあり、グランド横の狭い坂道を下り、4、5分で古い木造校舎の教室に着き、1クラス50人の同級生と授業を受けることになった。寮生活は1年で、あとは下宿での勝手気ままな生活になり、夏休み・冬休みは、アルバイトに明け暮れ、授業は時々サボり、あまり真面目な学生ではなかった。下宿は市電・六角橋の終点から少し離れた神奈川県自動車運転試験場の入り口近くにあり、早朝から大型トラックの往来がうるさかった。休日は時々東横線白楽駅前の映画館「白鳥座」で映画を楽しんだ。夜、空腹になると商店街の途中にあった「姑娘」という中華料理店に行き、好物のタンメンを食った。
4年次に岩佐教授のゼミで、教授から「もう少し勉強しないとダメだ」とお叱りを受けたことを覚えている。ゼミの卒業旅行は伊豆下賀茂温泉で、石廊崎灯台を訪れ、遊覧船に乗った。海無し県生まれの小生にとって楽しい想い出である。
1964（昭和39）年3月無事卒業し、山梨県庁に就職。勤務先は南アルプス北岳の麓にある野呂川発電所だった。ここは標高1、200㍍の人里離れた山奥で、近くの民家は、深い渓谷沿いの林道を車で40分下ったところの、山梨県の秘境と言われた奈良田部落である。北岳を源流とする野呂川の流域は、原生林であり、サルの群れや、カモシカを見かけることもある。この谷底の発電所の宿舎で4年間を過ごした。その後、人事異動で山を下り、以降二度と発電所の勤務はなく、定年を迎えた。
退職後、2014（平成26）年の春、卒業50年を記念し、友人（工業経営学科卒）と六角橋のキャンパスを訪れ、素晴らしく立派に変貌した母校の様子に感動したものである。
そしていま齢80を迎え、学生時代を追想し、筆を執ったものである。

投稿

神大の経験を社会人の自分へ

神奈川県　篠﨑 雄大（26歳）
2018（平成30）年 経済学科卒

私は大学時代、おもに二つのことに注力していました。ゼミナールと東日本大震災の子供支援ボランティアです。
ゼミナールでは「10年後の日本経済の諸問題」の中から「2025年の介護問題」を選択、研究していました。これを選択した理由は、ニュースで「介護難民」という言葉を耳にする時代となり、世界一高齢化の進む日本においては、喫緊な解決が必要となる問題と考えたからです。団塊世代の人々が75歳以上の後期高齢者となる2025年には、全国で43万人もが必要な介護を受けられない介護難民になると言われています。「介護」の現状と将来について、人手不足の要因と打開策を保険制度なども含めた多角的な視点から、より深い研究に取り組んでいました。この経験は今でも、何か問題が発生した時に一方的な視点でなく、多くの視点から問題解決を図る考え方ができるようになりました。
大学2年生の頃、東日本大震災の子供支援ボランティアに参加しました。その活動は、6人のグループが自分たちの企画したイベントで、子供たちと触れ合うというものでした。イベントを企画する際、グループの全員が子供のころに楽しんだ遊びを提案し、その遊びをイベントで行いました。しかし、子供たちはあまり遊びに興味を持ちませんでした。そこで私は、子供たちの立場に立って接することを心掛けました。具体的には、子供と同じ目線で話をしたり、口調を少し変えたりしました。次第に子供たちから声をかけてくれるようになり、遊びに参加する子供も増えました。この経験から相手の立場に立って考え、行動することを学びました。社会人になった今でもこの経験を生かし、お客様の立場に立つことで相手のニーズに応えることができます。
私は神奈川大学でたくさんのことを学びました。その一つ一つが今の自分の糧となっています。神奈川大学だからこそ経験できたことを、これからも長い社会人生活に生かしていきたいと思っています。

投稿

都会の中ののどかな風景

和歌山県　岡村 光惟（84歳）
1961（昭和36）年 法律学科卒

大学では多くの良き友に恵まれた。その中の一人に地元（神奈川県）の金子君がいた。6月、「田植えを手伝ってくれないか」といわれて彼の自宅へ行った。広大な屋敷、立派な母屋、土蔵もあり田畑、山林が続く大地主であった。家の裏には農耕用の牛も飼い、庭ではニワトリが遊ぶ光景に驚いた。
友は上に姉が三人、下に妹が三人の七人きょうだいだった。食事時はにぎ

やかで楽しかった。お姉さんから「ご飯のお代わり」の優しい催促。関西では食べたことがない「納豆」「焼いた生椎茸」「新生姜の味噌漬け」などなど。お母さんの野菜のタップリ入ったお味噌汁はとてもおいしかった。

　私も田舎は農家です。田植えは慣れているが横浜市に来て田植えをするとは思わなかった。牛の鼻緒を持って先導し、友は唐鋤（からすき）を操り、水田を耕し、翌日に田植えをした。たびたび遊びに訪れたが、五月は茶畑で茶摘みし、お茶作りも手伝った。それ以来、わが家も「八十八夜」が来ると自家製の新茶を作り「味・香り」を楽しんでいる。

　友の家は厚木街道に近かった。当時（1957年＝昭和32）、米軍関係の家族には厚木基地と横浜市の自宅を往復する大型の外車が多く「親指を立て、手を挙げると乗せてくれる時もあるよ」って聞いていたので試した。いくつかの車は通り過ぎたが、止まってくれた車があった。片言の英語と身振り手振りで理解し合って、そのまま山手の「外人墓地」近くの自宅に招かれ、家族の弾くピアノを聴いて楽しんだ。

　帰りは、港からの潮風に吹かれながら夕暮れの街を桜木町まで歩き、六角橋の下宿に帰った。

原稿を募集しています

『宮陵』(No.71号)への
ご投稿をお待ちしています。

▽発行 2022(令和4)年4月中旬
▽体裁 A4判、68ページ(予定)
▽部数 60,000部(会費を収めている会員に配布)
▽600字程度、テーマは自由。郵便番号、住所、氏名、年齢、神大卒業年・学科、連絡先〈メールアドレス・電話番号（携帯)〉を明記
▽締め切り 2022(令和4)年2月25日(金)。掲載分には記念品をお贈りします。原稿は一部手直しする場合があります。
▽〒221-0802 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
宮陵会本部『宮陵』(No.71号)係。郵送またはメール
（kyuryou-jimu@kanagawa-u.ac.jp）で。

神奈川大学宮陵会　広報委員会

オリジナル横濱スカーフ発売！

　本年4月に開設したみなとみらいキャンパスでは、国際人材輩出が一つのテーマになっています。この地で国際的な観点に立つには先ず先人達が遺した足跡やブランドを理解することが重要です。

　そこで、開港当時に横浜港の輸出商品の柱となったシルクを使用し、伝統の縫製技術を生かした“横浜スカーフ”を横浜のシルク産業の発展を古くから支える横濱繊維振興会に進行管理頂き、新キャンパス開設から共に次世代人材育成に協業頂いている日本航空株式会社の客室乗務員が描いたデザインをベースに、オリジナル製作しました。

　デザインは横浜市花である「バラ」をモチーフに横浜の観光名所が描かれたポップな仕上がりになっています。

販売価格：10,000円（税込）

　また、この取り組みは観光振興の一環として、横浜市のふるさと納税の返礼品としても採用いただいています。

販売は
KUPストア　URL：https://store.shopping.yahoo.co.jp/ku-partners/
（お問い合わせ：KUパートナーズ　☎ 045-491-1775）

300枚
数量限定発売

11月14日の「第6回横浜絹フェスティバル」オープニングイベントでは、神奈川大学の学生がお披露目PRを行いました。（横浜市役所）

第98回 東京箱根間往復大学駅伝競走応援ガイド 1月2・3日

この度の競技会（第98回）においても主催者の関東学生陸上競技連盟からの自粛要請もあり、新型コロナウイルス感染防止のため、OB、OG、大学関係者、同窓会組織、選手のご家族など応援は自粛し、大幅に縮小します。テレビやウエブでの中継やラジオ放送などで観戦・応援していただくようお願いします。沿道等においては大学名の幟や小旗はもちろん、号外や大学新聞など関連配布物は全て禁止としております。

宮陵会会長　久保 清治

箱根駅伝の応援に関するお願い

- ●第98大会はスタート・フィニッシュ地点および各中継所、コース沿道での応援、観戦はお控えください。テレビなどでの応援、観戦をお願いします。
- ●大学関係者、OB・OG・同窓会組織など卒業生の方や、選手のご家族の沿道での応援や観戦もご遠慮ください。
- ●コース沿道での場所取りはご遠慮ください。確認された際には、撤去させていただく場合があります。
- ●大手町スタート／フィニッシュ地点、各中継所、芦ノ湖フィニッシュ／スタート地点でのイベント（大型ビジョンの設置、プログラム・グッズ販売、飲食等の提供ブースなど）は行いません。また、付近の立ち入りを規制する可能性がありますので、来場はお控えください。
- ●1月2日の芦ノ湖および1月3日の大手町での号外の配布は行いません。
- ●読売新聞社や報知新聞社の小旗の配布は行いません。

禁 止 事 項

- ●横断幕、旗、のぼり等をガードレールや橋などの沿道公共物へくくりつける行為は道路交通法に違反します。
- ●大学新聞の配布は禁止としております。
- ●自動車、自動二輪車、自転車等の車両による応援は危険であり、交通渋滞を招きます。
- ●コース周辺での無人飛行機（ラジコン、ドローン）操縦、飛行、自撮り棒の使用はできません。

はなれていても「Team JINDAI」心ひとつに

テレビ・ラジオの前で熱い声援を送ろう!!

神奈川大学HP&SNSをチェック！

神奈川大学駅伝サイト

Access!

https://ekiden.kanagawa-u.ac.jp/

上記URLにアクセスしてください。当日、選手の速報をお伝えします。

エキデンサイト　Facebook　Twitter

大会当日はもちろん、大会前から様々な情報をホームページやSNSで配信しています。